デジタルパンク通信　第二話　2000年4月号

Q　機能でしょうか。美でしょうか。

A　美です。

前回のMILIAでのこと。激突しました。ある映像部門で、私はキレイなアナログ作品を推したんですが、米英の審査員が最新テクノロジーを駆使した作品を推して対立。こんなにリアル、こんなに速い、どうだどうだ、って敵は言うんです。デジタルの人やハリウッドの人のいつものノリ。

でもさあ、そんなテクノロジー、3日もすれば古くなってるよ。筆はヒツジの毛がいいかタヌキがいいか、みたいな話でね。道具より大切なのは、表現するタマシイってやつだ。絵筆がなくたって、業のあるヤツは、指切ってしたたる血で描く。工科大学のオレが言うのもヘンだが、テクノロジーなんてものは、征服して、従えてから、それでもほめたきゃほめりゃいい。そこんとこ事務局はどうなんだ。どう思ってんだ。え？すると事務局のフランス人の連中、ドーでもイーみたいで、廊下でタバコすってワインでべろんべろんになってやんの。審査員たちに一生懸命はたらかせて。あー、こいつらの、こういう態度、正解だ。抱きしめてやる。

デジタルで、便利です。機能的です。効率的です。それは近代がずっと追い求めてきたものです。明治以降それが第一テーマだったわけです。おかげで、スピードが上がりました。ムダがなくなりました。スカッとしました。だから、ムダな人、たとえば体をムダにひねって投げるノモは、日本から追い出されます。ムダなフォルムのクルマ、昔のデボネアがかろうじて残していたようなゴテゴテ感、みたいなのは追放です。

社長とヤクザしか持ってなかったケータイは使い捨てになった。いまオヤジが持たされてるのは会社からの監視装置だ。情報にアクセスできる便利さ？もうそれは、貧しさの象徴だ！そう、ケータイのスイッチを自分で切る根性があるかどうか、情報を拒絶する権力があるかどうかが、エグゼクチブかどうかの分かれ道であります。

この100年、機能を追求して、テクノロジーに乗っかって、どうやら非ゴージャス路線を一直線に進んできてしまったのです。けっこうあれこれ失ってしまった。便利とひきかえに。そして科学技術は自然環境と同居することが難しくなってきました。昔の子供は夢みていました、エアカーでハンバーガー買いに行く未来を。でも今の子供は核戦争とクローンから逃げ惑う地下の未来図しか描けない。窒息してます。近代テクノロジーでは突破できない。

でもそれはデジタルの趣旨ではない。デジタルで取り戻せ。

だから、他人の作る道具をありがたがるより、自分の内側を点検する季節です。ルネサンス、ってやつですか。簡単なところから始めましょう。使う言葉を変えていきましょう。解像度、bps、視聴率、リアル、クリア、総製作費、そういう言葉を減らしてそのかわり、こういう言葉。美しい、エレガント、かわいー、エロチック、かっこいー、グッとくる、おいしい、イカスー、くだらねー、いみねー、えげつなー、しあわせならたいどでしめそうよ．．．